
黒の勇者と白の英雄

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の勇者と白の英雄

【Zコード】

Z1932BA

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

親友と帰宅している途中の主人公はとある神様の頼みで、自分のいる世界とは違う別の世界に行く事になり……。あまり無いと思う勇者と英雄のダブル出演です。こちらは投稿速度は遅いでしょうが勘弁して下さい。

ありがちな第〇話

「勇者様と英雄様に敬礼！」

俺の目の前にいた大体五十人ぐらいの兵士達が一斉に敬礼してきました。もちろん勇者ってのは俺の事だ。つていつか英雄って様付けじや無くね？

ちなみに俺は輝宮黒谷。てるみや くろや英雄ってのは昔の俺の親友、白坂昭道しらさか あきみちだ。

「なあ、どうしてこんな事になつたんだつけ？」

「それはずいぶんと前の事を思い出さなくちゃいけなくなるが、いいのか？」

「構わないから説明してくれ。ぶつちやけ俺は来たばっかりだから、この世界の事とかよく分からんし」

「世界の事は後でゆっくり教えてくれる人がいるけどな。とりあえず、御苦労さま。下がってくれていよいよ」

「ハツ！」

兵士達が皆下がつた後、俺達は喋りながら進み始めた。さて語るにどうか。俺がこの世界に来てから今日までの出来事を。

あらがちな第〇話（後書き）

一作目とさせていただきます。面白ければよこのですが。

第一話・そして少年は告げられる（一）

俺は昭道と学校に帰る途中だった。俺達は高校一年で学校にも慣れて、面白くも無い学校生活を送っていた。

「クロ？ 訊いてんのか？」

「ああ悪い。それで何だつて？」

「だからさ、今日の数学のそ……」

さつきから訊かされているのは、おもに昭道の愚痴だった。成績が良くないから、昭道は大体テスト前に俺に頼つてくる。俺は授業だけでしつかりカバーできるので、自学実習とかほざく大人は黙れと思つてゐるほどだ。

『そこ』の君、ちょっと良いかな？』

「何か用か？ 神様」

俺の視線の先にいるのは、金髪の外人さん。これだけならまだありえない事じやない。でも神様はさつきから空中を浮いているんだ。会つて喋るようになつて以来、俺はこの人を神様と呼びこの人は。

『まあまあ、良いじやないか。勇者の卵君は忙しい訳じやないでしょ？』

「そりゃそうだけど。でも、それとこれとは

関係がない。と言おうとしたがその言葉を言つ前に、神様に言わてしまつたのだ。何をかつて？もちろん、異世界移住宣告をさ。

『日常が楽しくないと思つてゐる。そんな君には異世界への片道切符を上げるけど、どうする?』

第2話・そして少年は告げられる（2）

何言つてんだ？この人は、異世界への片道切符？そういう場合は大抵言われる奴が勇者とか英雄やらになつちまうだろ？

あれ、でもこの人俺を『勇者の卵』って呼ぶよな？つて事は何？俺は勇者でしたつてオチか？

「別にどつちでもいい」

「お？ 言つねえ。話をとりあえず訊いてくれるかな？ そこの『英雄の卵』君と一緒に、わ」

俺が昭道の方を向くと、なんか瞬きしながらじつちを見ていた。あれ？ 神様の事見えてるのか？

俺が初めて会ったとき、他の人には見えないから。とか言ってたのに。しかもなんだつて？『英雄の卵』？ もう完全に意味分からなくなってきた。

「私はここ以外に、もう一つ世界を担当してるんだけどさ。そこに別の神が『魔王』を生み出しちゃったのよ。それで、私のお気に入りの子にお願いされちゃったのよ。『助けて下さい』ってさ」

「そんなんもん自分の世界でどうにかすりやいいだろ？ 何か特別な力を持つ奴に、それこそ勇者の装備的な物を用意してやれば。俺が出張る必要無いだろ？」

「それが出来たらこんな事は頼まないよ。私のお気に入りの子以外、極めて強い特別な力を持つ子がいないのよ。その点君はバツチリよ。特別な力を持つてる。

大体君は本当はこの世界で言つ『魔王』だったのよ？ でも、君の隣にいる『英雄の卵』君が友達になつた事で、その運命は変わり君は

『勇者の卵』になつたの

「それは本当だつたら俺は、昭道いやアキと鬭つ事になつてたつて事か？」

「そうだね。それで、どうする？ 向けの世界では君を必要としている人がいるんだけど」

「それなら仕方ないか。行くよ。俺しかいないんだつたらな」

「あの、神様。俺はまだ駄目なんですか？」

「君はまだ駄目。こっちの彼の方が早くに修業を始めてたから、完成度としてはこちらの方が高いのよ」

「そう、ですか」

アキは寂しそうな顔を浮かべつつも、次の瞬間には笑顔で振りむいた。

「頑張れよ。もしかしたら、俺もそっちに行くかもしれないからそれまで頑張れよ。クロ」

「当たり前だろ？ お前こそ勉強なんとかしろよ？」

「それ言つなよ。それでお前、彩香には言つていいくのか？」

「その必要はないだろ？ どうせ俺に関する記憶とかは消すんだろう？」

「まあね。君の情報が残つてると、この世界に歪が生じるしね。でも『英雄の卵』君からは奪わないよ。サービスだよ」

「それでいつ迎えに？」

「今夜零時に君の家の玄関先で。荷物とかまとめときなよ」

「そうする。お前はどうする？」

「もちろん見送りに行くよ。だから、頑張れよ」

「はいはい。それじゃ、とつとと家に帰るとしようかね」

「そうだな。それじゃあ神様、また後で」

「うん。バイバイ。頼んだよ?『勇者』君

そう俺に告げると、神様はスゥー、と姿を消してしまった。俺は家に帰るとアキに協力してもらいつつ荷物をまとめ始めた。

第3話・そして少年は旅立つ

「これで終わひとつ。それじゃあ、ほい。この世界で最後の俺の料理だ」

「おお、『そうだな』。しかしあ前の料理をこの世界で食うのもこれが最後、か。なんだか感慨深いよな」

「そうだな。お前があの時声をかけてくれなきや、今の俺は無かつたけどな」

「声をかけたらとんでもない喧嘩になつたじゃねえか。あれ、結構いたかつたんだぜ?」

「仕方ないだろ?あの状況でみんな軽い声をかけられなんかしたら、さ。それよりもとつとと食え。温かい内が上手い料理しかないんだぞ?冷めたら本来の旨みが無くなる」

「お、それもそうだな。早いとこ食わないと」

「それじゃあ、私も」と相伴にあづからうかな

「……いきなり登場するのは止めてくれませんか?神様」

「ま、良じじやん。ほり、早く食べようよ」

それから俺達は、喋りながら食事をつづけた。零時まではめちゃくちゃ速かった。それから俺は荷物をしまう作業に入つた。

「『』の荷物を汝の中へ『黒影』」

俺の足元の影が伸びて、俺の前にあつた荷物を全て呑みこんだ。呑みこんだとはいっても別空間に収納してるだけなんだけど。

「あ、君を送る世界はスキル制になつてるから

「スキル制？それってあれか？剣術〇〇レベル、とかそんな感じか？」

「そりそり。君は魔術のスキルがマックスの100になってるから、魔術想像のアビリティ^{アビリティ}能力がつくよ」

「そりゃあ、ありがたいね。でも普段通り、俺の黒の力と名前でのみ発動するんだろ？」

「ええっとね、もう出来る術だつたら無詠唱でもできるよ。でも、新しい術は無理だから」

「了解。それじゃあ、行くとしようか」

「そうだね。準備は万端みたいだし、玄関の外に出て。もう出来上がってるから」

「わかりました。アキ、無いとは思つけどもし彩香が俺の事を覚えていたら、この手紙を渡してくれないか？」

「……わかった。でも、無いと思つぜ？」

「それでも、だよ。一種の希望だから」

「そうかい。確かに預かつた」

「……ありがと。それじゃ、じゃあな」

俺達が表に出ると、魔法陣が光り輝いていた。この光も他の人は見えない。見えるのは特殊な力を持つ者だけらしい。

「何？この光は……一体何なの？」

「彩香……。どうしてこの光が見えるんだ？いや、そんな事はどうでもいいか」

「ちょっと、どうこう事よ！？クロー！」

「後の説明はアキに任せた。じゃあ、さよならだ。バイバイ、彩香。

我が翼、異なりし世界を飛ぶ力を与えよ。『黒翼』

俺の背中から黒い翼が生えた。鳥のような常闇の色。でも、綺麗な色。それを羽ばたかせ空中に浮いていた陣に向かつて飛翔した。そして俺は、生まれてから16年間育った世界を捨て、別の世界に飛び去った。

第4話・異世界に到着

俺が魔法陣を通り抜けた先にいたのは、青い髪に紅色といつぱりも幻想的な姿をした人だつた。しかも格好が巫女服。

あれ? こいつて異世界の巫女だよねと思つたが、後ろの集団を見るとやっぱりそうだと思いなおした。だって武装した兵士の人があつて沢山いるんだから。

「あの」

「あ、はい。なんでしょつか?」

「あなたが神様が送つて下さつた勇者様ですか?」

「ええ、一応は。ところで、俺がここに召喚された理由が『魔王』の出現とか訊いたんですけど」

「はい、そうです。それがどうかしましたか?」

「あそこには、言つていた魔物の類ですか?」

「え?」

俺と巫女さんの視線の先には、大量のいわゆるゴブリンと言つ類の名前のモンスターがいた。うわ、リアルだとあんな感じなんだ。
気持ち悪。

「そんなこんな所まで……」

「ちょっと失礼! 我が身を守れ! 『黒壁』!」

俺の目の前に黒い壁が表れて、跳んできた流れ矢の一本を防いだ。
さつきの武装した兵士の皆さんはすでに戦闘を開始していた。

俺も行こうとすると、さつきの巫女さんが俺の袖を引っ張つて止めた。

「何ですか？」

「勇者様が行かなくても大丈夫です。ですから早く私たちは城に戻りましょう」

「何言つてるんですか？俺は確かに『魔王』を倒すために呼ばれたかもしねえ」

「だけど、その前に助けられる人を助けなきゃ始まらないでしょう…」

「で、ですが」

「でも何もない！あなたの身は守ります。ですけれど、あの人は達も今の俺には守らなきやいけない人なんです！」

俺は巫女さんに結界を張った後、走り出した。しつかし、ついたらいきなり戦闘とか運ねえな。

俺はゴブリンが落としている石でできた剣を拾うと術をかけた。

「『』の剣に我が力を。『黒化』」

剣を黒い物が纏い、刀身を構築した。これは何かを媒体する事で、俺の思つた物の硬度を作り出す事が出来る。今の硬度は鋼、つまり剣と同じだ。

それで近くにいるゴブリン共を薙ぎ払つた。すると簡単に倒れた。うわ、なんじやこりや。弱過ぎだろ？

今度は『』と矢を拾うと、構えた。もちろん『』には術をかけ始める。

「おい、兵士の皆ー早くここまで撤退しろ！そいつら全員まとめて吹き飛ばす！」

「わ、わかった。退却、退却！閃光魔術用意！」

ローブを被つた魔術師風味の人たちが一気に閃光魔術でゴブリンの眼をつぶしていた。これはやりやすいな。

「我が敵を射抜く力となり、その全てを吹き飛ばせー!『黒爆破』ー。」

矢が当たった中心点から、黒い色のとんでもない爆発が広がりゴブリンを一気に焼き尽くした。それで俺の初陣は終わった。はあ、雑魚すぎるだろつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932ba/>

黒の勇者と白の英雄

2012年1月5日21時49分発行